



TITLE:

レヴィー博士の憶出

AUTHOR(S):

羽田, 亨

---

CITATION:

羽田, 亨. レヴィー博士の憶出. 東洋史研究 1936, 1(3): 283-287

ISSUE DATE:

1936-02-28

URL:

<https://doi.org/10.14989/142932>

RIGHT:

# レヰー博士の憶出

羽 田 亨

世界の學界の哀悼を後にして、レヰー博士の永眠せられたのは、早くも三月餘りの過去となつた。今は既に時機を失した嫌があるが、編輯子の切望にまかせ、一二博士に係る自分の憶出を記して追慕の情を表したい。

初めて博士に逢うたのは、自分の歐洲遊歴日誌「西航記」を繰ると、大正九年（一九二〇）十一月十九日の夜であつた。當時巴里に滞在して毎日敦煌文書の研究に従事して居つた自分は、この夜ベリオ教授をポルト・マイヨール近くの日本人俱樂部Ⅱというても天井の低い木造の如何にもお粗末な借家であつたがⅡに招いて、日本料理を馳走することになつて居た。それを同宿の大住嘯風君が知つて、丁度好い時だから、レヰー博士御夫婦をも招き更にオートゼチュードのウルセル教授、名譽領事のシユバリエ氏をも招待し、それに丁度この頃巴里に逗留し

て居られた藤代教授と、佛語の達者な船橋君（現名古屋大講師）にも出て貰つて、歡談の機會を作らうではないかといふので、遂にその通りに運ぶことになつた。倫敦から巴里に移つた自分は、既に二ヶ月許りを巴里に過したのであつたが、多くはビプリオテーク・ナショナルとかミューゼー・ギメーなどの陰氣な部屋の中や、ペリオ、ハツカン諸氏などとの往來に費し、自からも希望し友人からも誘はれながら、まだ博士を訪問することを怠つて居つたので、この夜初めてあの白髪童顔の溫容に接したのであつた。少しの隔てもなく飾り氣もなく、極めて氣輕に愛想好くそれこれの話題を提供して行かれたので、窮屈も手持無沙汰もなしに、來會の時間を遅れたベリオ教授を待つことが出來た。やがて俱樂部の料理人が有りつたけの工夫を凝らしたといふ日本料理の宴會を

始めたが、博士は曾ての日本遊歴の経験によつて、隣席の令夫人その他に、口取り、吸物、刺身などの料理の順序から食べ方などを、大に得意で説明しつゝ、實は危かしい手つきで頻に箸を動かされた。箸ばかりではなく酒杯もまた頻に舉げられ、博士の健康を始終氣遣はれる令夫人から注意が飛んだりした。沈黙勝ちなのがウルセル氏、何ごとにも如才ないのがシュバリエ氏、よく食ひよく飲み、よく談ずるのがペリオ氏で、話はいつも氏によつてリードせられた。

博士はこの少しく前に日佛協會雜誌に發表せられた日本の船に關する研究に引續いて、重ねて印度の船の考究に従事せられた際であつたらしく、その造船技術の由來について、言語や歴史の方面から誰彼を顧みては熱心に論談せられ、つい小さい盃の酒をこぼして、またしても令夫人の注意が加へられた。誰やらがその中、姓名判断のやうなことをやり出したのにつりこまれた自分が、うつかり「レ井ー」といふ名が大學者を作り上げたやうに」といひ乍らハツと氣づいて口元をつめり上げたいやうな氣分になつた瞬間に、それを察してか察しないでか、そのレ井ーといふのも語原はよく解らないので」と、博士

自身がついでくられたのでホツとした。各自の名前を自署した葉書を京都の數氏に寄せた残りの一枚が、今も日記の此の日のところに挟み込んであるのはよい記念である。

こんなことで初めて博士に面接した自分であつたが、その後の三月餘りを、また訪問することもしないで過ぎたのは、相變らず敦煌病に罹つて居つた爲に外ならぬ。西航記に據ると翌年三月五日土曜日の午後九時頃に、初めて博士のお宅を訪問したことを記して居る。

「土曜日を博士が面會日にして居られることは豫てから承知して居つたが、けふまで訪ねる機會を得なかつた。昨日嘯風が博士に逢うたところ、僕の近狀を尋ねられ、明日は一緒に來るやうにとのことであつたから是非行けといふ。嘯風について夜の九時頃その宅を訪ふ。學者はこの國でもあまり物質的には恵まれぬと見え、質素簡朴の住居なり。博士と令夫人とは次々に集り來る客に愛想よく應接せらる。男客には亞細亞協會にて顔見知りのメイユー氏を始め、アラビヤ學者のフェルラン氏、ギメー博物館のハツカン氏、露西亞のエリセーエフ氏、印度のダルマ・パラ氏、ナグ氏外一人

その他數氏、女客も五六人あり。日本人は嘯風と僕となり。博士は僕をその書齋に導き、藏書を示さる。嘗て余の校合したる大唐西域記の大學より寄贈せられたるを示し、この書は常に坐右を放さずなど如才無き應接なり。案内せられたる三室の書架は、コルディエ氏の本箱の立派さとは比較にならねど、藏書は内外博きに亘り、和漢の書も縮藏以下梵語・佛敎に關する主要なるものは備はれるが如し。女客は令夫人を助け、茶よ菓子よビールよザンドウイツチよと、來客への給仕に任ず。主客の話は多く佛敎や梵語に關するものなりしが、ナグ氏はガンダーラ美術に於ける希臘要素の然く大ならざるべきを熱心に論じたり。明日僕の寓居を訪ふべしといへり。諸國の學徒この間に渾然融和し、小研究會小社交機關の目的を達成せり。我が國でも偉い先生達が、かゝる面會日を設くることを考ふべきなり。寓に歸れば十一時に近し」

と走り書きしてある。近く伊太利旅行に上る自分の爲にローマに在る博士の敎へ子なるフォルミキ敎授に紹介狀を書くといはれたので、次の土曜日には約束に従つて午後三時頃に重ねてお宅を訪うた。この日も男女十數人の

客が集つて居つたが、肝腎の御主人がまだ歸つて來られない。令夫人が氣を揉まれるが致方もない。自分の隣に腰をかけたハツカン氏は「また約束を忘れて圖書館で一生懸命讀み耽つてゐるのだよ」と嘯いた。「また」といふから、度々そんなことがあるのかと聞くと、「珍しいことではない」といふ。どこの國の學者も大概同じ型だなど思はずほゝ笑まざるを得なかつた。暫くすると大急ぎの足取が馳せつけたのが、赭い顔をハンカチで拭きながら「遅くなつた、遅くなつた」と繰返しながら歸つて來られた博士であつた。一寸きまり悪いやうな眼を令夫人の方に向けられただけで、早速誰彼と例の特徴ある鏽聲で話を始められた。きつと遅くなつた理由のいひわけをせられたのであつたらうが、それがどういふ事であつたかは今自分には記憶がない。この日更に他の人に逢ふ約束のあつた自分は、目的の紹介狀を貰ふと一同に先立つて辭去した。この紹介狀は羅馬で大に役立つて、そこに滞在の一タをフォルミキ敎授の宅に招かれ、食後ファリスト氏の印度日耳曼文化發達史に關する氏の率直な意見を聞いたり、音樂家である令妹の獨唱する妙曲を聞いたりすることを得た。

その後我が國に來遊せられた大正十二年、昭和二年の兩度とも度々京都で逢ひ、いつも活き活きした健康色を漲して居られるのを慶賀したのであつた。

梵語學者として名聲を擧げられた博士が、この三十年ばかりの間、更に龜茲語の研究に精進せられ、中亞に於ける印歐語の祕密の幕を捲き上げるのに大功を立てられたことは、凡そ言語の學や東方の學問研究に従事する誰もが知ることである。大正十一年には東西の兩大學で、昭和二年には東大でこれに關する特別の講義が開かれ、また諸種の會合に於ても屢々これに論及せられたことは我が國の東方學術發達史上にも特筆せらるべきことで、近時東京の福島氏を始め、漸く擡頭の勢を示して居るこの方面の研究は、博士の此等の講義や指導に負ふところ多いのは言ふまでもない。

こゝで甚だ烏滸がましいが、一寸記述の廻り途をして附け加へて置かねばならぬことがある。この龜茲語即ち中亞出土の文書によつて初めて知られた不明語中の所謂第一言語のB種に對する命名については、隨分曲折を経て今日に至つたのであつて、一九一三年には博士はこれをクチャ語と命名されたが、それは嘗てクチャの境域に

行はれたものであるからといふ以外には、別的確な證據理由を伴はなかつたので、まだ一般の承認を得るには至らなかつた。然るに自分は昭和五年五月東京の史學會大會の講演中の一節に於て、ウイグル文の摩尼教文書や佛典にキュセンと記されてある名を解釋して、これこそ唐代頃のトルコ族が龜茲を稱する名であつたことを明らかにし、曾て獨逸のミュラー博士等がトルコ文佛典の奥書に見えるキュセン語といふ名を、クシヤナ即ち貴霜の語と解釋し、世界の學者が皆これに従つて居ることの誤であることを指摘し(同年九月號史學雜誌所載拙稿參照)ついで同年十二月にはこれ等の文書を詳解して、重ねてこの意見を公けにした(桑原博士還曆記念東洋史論叢所收拙稿參照)。これ等の論文は共に佛文に翻譯し、前者は昭和八年(一九三三)日佛學館から、後者は昭和七年(一九三二)東洋文庫から出版せられた。これによつて唐の頃に龜茲に行はれた言語を、トルコ語ではキュセン語と呼んで居つたことは疑なく、従つて博士が嘗てこの地に行はれた第一言語のB種をクチャ語若し唐代に行はれた漢字を當てはむれば龜茲語と命名されたことは、單なる便宜や想像ではなく、かく呼ぶことが正しいことの

證明を得た譯である。自分のこの論文はその要領をベリオ教授が逸早く一九三一年に通報誌上に載せ、更に一九三四年ジュニナル・アジアチックに寄せた「トクハラ語とクチャ語」といふ論文の中に引用して、クチャ語といふ名稱の適切なることを論證して居るが、これがレゾー博士に傳へられたのも、矢張り同氏に依つたものと見え、昨年七月末(?)に接手した博士からの書面にその旨が記され、且つ佛譯のものは讀んだが、若し餘分があるなら日本文のものをも贈つてほしいとのことであつた。怠り勝ちの自分がそれに應じて兩種の抜刷を發送したのは、その後十日餘りも経てからのことであつたと記憶する。自分の小研究が印刷せられて伯林に届いたのが、既にミユラー博士の物故せられた後であつたのは遺憾であるが、キュセン即ちクシヤナ(貴霜)語の佛典から作成したと考へしめた或るトルコ文佛典が、實はキュセン即ちクチャ(龜茲)語から作成せられたものであることを博士の存生中に傳へ得て、その持説を支持し得たことは、今にして憶へばせめてもの心遣りである。

博士はその専攻せられた學問の關係からでもあるが、我が國の東洋學研究の成績を甚だ尊重せられた人で、相

ついで現はれる論著については、その書名や題目、出來得れば内容の梗概をも併せて、英・佛・獨何れかの言葉で紹介して欲しいと度々希望して居られた。これは單に博士一個人、若くは歐洲の東洋學者の欲求としての聞き流すべきではなく、我が學界の擧げた成績を廣く世界へ紹介して、學術的にも躍進日本の眞相を傳へることに於て最も意義あることで、當に自から努めなければならぬところである。現在國際文化の振興に努力せられる機關などに對して、その實現を切望して止まない。日本の學界が氣になるなら、日本語を學べばよいではないか、などいふ近視眼的議論に對しては、更めて辯を費す要はない。こんなことを書き附けることが、今は亡き博士の希望の實現されることに、何かの機縁ともなり得れば幸である。

x                      x                      x

「この次は巴里で」と差出される暖い手を握つて京都驛頭に別離を告げたのは、早も八年近い昔となつた。知らず再び巴里の地を踏んで冷い墓前に額づく日の有りや無しや。

(昭和十一年二月十日)